



分数について、「1」を出発点として、二等分、三等分したものが基準になるという話を覚えていますか？ このところの単位の話も基準となる「単位1」を意識しながら、読んでいて下さい。算数・数学では、いろいろ雑多なことをバラバラに覚えるのではなく、基本となる考え方の元で統一的に理解していこうとしていけば、勉強すればするほどすっきりしてくると思います。しかし、各分野で紛らわしいことや混乱することは必ずあります。ここでは、前回の単位の名称で、日常の言葉にもよく耳にする「マイクロとミクロとマクロ」について、説明していきましょう。単位というものは、「メートル法」以前は、理論的に決められたものではなく、経験的なものでした。もう知っている人は少なくなりましたが、昔は日本にも尺貫法という単位系がありました。これは唐が起源と言われていて、東アジアで広く用いられていました。尺（しゃく）が長さ、貫（かん）が重さ、体積が升（ます）を基本単位としていましたが、尺は手の長さから決められたということです。不動産の面積「坪」やお酒の一升（しょう）瓶の「升」、炊飯器でご飯を炊くときのお米の量一合、二合の「合」などは今でも使われていますし、「尺」の十分の一の「寸」（約3cm）、その十分の一の「分」を用いた「一寸の虫にも五分の魂」という言葉もあります。さらに、真珠の取引単位の質量は、「貫」（3.75kg）の千分の一の「匁」（もんめ）（単位記号は mom ）が国際単位として使われています。英語圏では、今でも「ヤード・ポンド法」が使われていますが、長さの基本単位「フィート」は、英語の foot(足)の複数形が"feet" から分かるように足の長さを元にしてしています。しかも、単位がダース（鉛筆の1ダースは12本）に見られるように10進数でなく12進数のわかりにくい単位系です。10進数などについては、また述べていきますので、疑問の点等あれば、質問をお寄せ下さい。英語圏の国は、合理的かという点、単位に関してはそうでもないことも分かります。偶然にも、「尺」と"feet" は、いずれも約30cmです。このように、単位は一筋縄ではいかないのですが、マイクロとミクロについては、実は同じものなのです。この二つは「ごく小さいという意味」や「100万分の1」を表し、また他の単語の前について、新しい単語を作ります。少し調べると「マイクロフォン」「マイクロバス」「マイクロチップ」「マイクロウェーブ」「マイクロワールド」「マイクロデータ」などがありました。つづりは"micro"で、ギリシャ語で「小さい」という意味の μικρός (mikros) に由来し、1874年、電磁気の単位の標準化を行う際に、メガとともに新たに導入されました。明治維新後の日本では、学術の手本としていたドイツ（カルテで分かるように、例えば医学用語はドイツ語が基本です）など英語圏以外の国は"micro"を「ミクロ」と発音していたため、まず「ミクロ」が定着したようです。その後、英語読み「マイクロ」が入ってきて、現在では「マイクロ」が主流のようです。ちなみに「ミクロン」というのを聞いた方もおられると思いますが、これも長さの単位で、「マイクロメートル」と同じですが1997年から、「ミクロン」は使用しないことになりました。これからは「マイクロメートル」「メートル」の百万分の一をしっかりと覚えて下さい。ちなみに"ppm"は、ごく微量の濃度を表す割合の単位で、百万に対して、いくらかということです。

そして、紛らわしい「マクロ」"macro"です。「マクロ」は「巨大な（もの）」「巨視的」を表す言葉です。（ギリシャ語 makros、長い）が語源。現代の経済学では「マクロ経済学」「ミクロ経済学」というのが二本の柱です。（割合の号で、また説明します）

ミクロ経済学は、最小単位の「消費者」や「生産者」の行動から数理的モデルを作り、演繹的・数学的方法によって経済を分析します。一方でマクロ経済学は、個別の経済活動を集計したデータ、例えば一国の経済を表す指標 GDP などを用い、大きな枠組みで経済を研究します。これから、経済学の方へ進もうという人は、心に留めておいて下さい。